

●デヴィッド・フォスター・ウォレス

「日々の暮らしにおいて、実際には無神論というものは存在しません。礼拝しないという選択肢はありません。誰もが何かを礼拝しています。我々にできる唯一の選択は、何を礼拝するかです。神やら霊的なもの - それらがキリストであれ、アラーであれ、ヤハウエであれ、母なる女神であれ、四諦(したい)であれ、あるいは破られることのない倫理原則であれ - を選択すべき理由は、これら以外のものを礼拝すれば、それらに食い尽くされてしまうからです。もし金や物を礼拝し、そこに人生の意味を見いだそうとすれば、いつまでも満足することはありません。十分だと感じることはないでしょう。これは事実です。自分のカラダや美しさ、性的魅力を礼拝するならば、常に醜さを覚え、時が経ち、老いを感じ始めると、実際に墓に入る前に何百万回も心の死を経験することになるでしょう。…力を礼拝すれば、最終的には自分の弱さや恐怖を感じるようになり、その恐れを麻痺させるために、更に力を求めるようになるでしょう。知性や賢く見られることを礼拝すれば、常に自分が愚かで、偽物だと感じ、いつか正体がバレるのではないかと怯えて生きることになるでしょう。こうした礼拝が厄介なのは、それ自体が邪悪だとか罪深いとかいうわけではなく、無意識に行われているということなのです。それが私たちにとって初期設定なのです。」

※イザヤ 43:7

「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」

※ローマ 1:21, 25

「それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。…彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。」

▶2017年版：「イエスは彼女に言われた。

「女の人よ、わたしを信じなさい。…」(21)

○神様が喜ばれる“真の礼拝”とは

1. 真の礼拝とは _____ (21)

※申命記 12:5

「ただあなたがたの神、主がご自分の住まいとして御名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ぶ場所を尋ねて、そこへ行かなければならない。」

※2 歴代誌 6:6

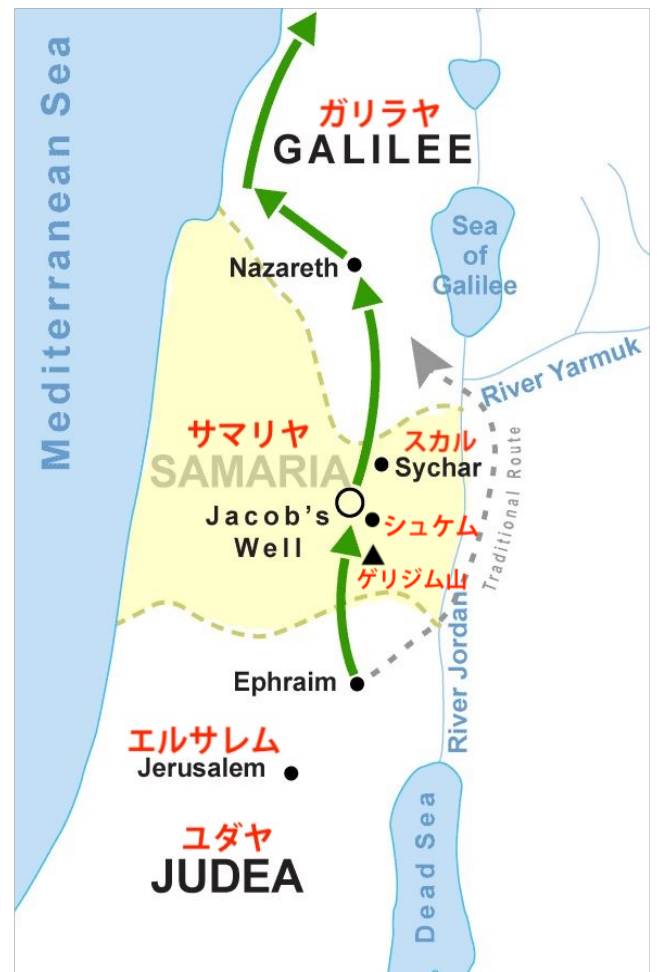
「ただ、エルサレムを選んでそこにわたしの名を置き、ダビデを選んでわたしの民イスラエルの上に立てた。」

※詩篇 78:68; 132:13

「ユダ族を選び、主が愛されたシオンの山を、選ばれた。」
「主はシオンを選び、それをご自分の住みかとして望まれた。」

※創世記 12:6-7

「アブラムはその地を通って行き、シェケムの場、モレの榿の木のところまで来た。…そのころ、主がアブラムに現れ、そして「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える」と仰せられた。アブラムは自分に現れてくださった主のために、そこに祭壇を築いた。」



引用(<https://jp.pinterest.com/pin/20829155149251464/>)

※申命記 27:11-12

「その日、モーセは民に命じて言った。あなたがたがヨルダンを渡ったとき、次の者たちは民を祝福するために、ゲリジム山に立たなければならない。」

※ローマ 12:1

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」

2. 真の礼拝とは_____ (22-24)

※マルコ 7:6-7

「イエスは彼らに言われた。「イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。…』」

※詩篇 103:1

「わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。」

※ルカ 1:46-47

「マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」

「心のない礼拝は存在しない。それは舞台での演技であって、本当は自分ではない人の役を演じているに過ぎないのである。偽善者という言葉の本来の意味は、舞台役者である…私たちはたとえ完全でなくとも、神を礼拝していると言えるかもしれない。しかし、もし誠実さを欠いているなら、もはや神を礼拝しているとは言えないのである。」(スティーブン・チャーノック)

「御言葉と礼拝とは互いに切り離すことができません。全ての礼拝は、神の啓示に対する知的かつ愛に満ちた応答であり、すなわち、それは神の御名を崇めることなのです。」(ジョン・ストット)